桜・さくら・サクラ

この記事を皆さんが目にする頃には、近くの桜が咲き誇り、賑やかに宴が催されている頃でしょうか。

米原市で桜といえば、湖北を領し二代将軍秀忠の御台所「江」の妹婿である京極高次を輩した、京極氏の菩提寺「清瀧寺徳源院」にある "導誉桜" を思い浮かべる人は多いのではないでしょうか。導誉桜は、南北朝期に「バサラ大名」と異名をとった京極高氏(導誉)御手植えの桜と伝えられるエドヒガンザクラの一種です。樹高約20m、幹廻り約2.2mを測り、樹齢は約300年と伝えられ、多くの人に親しまれています。

また、桜は愛でるだけでなくて、樹皮を使った日用品の「樺細工」や桜の花を塩漬けにした「桜茶(桜湯)」、あんこを包んだ「桜餅」などとしても親しまれています。特に「樺細工」は東北・秋田地方が著名ですが、昨年の大震災により影響があったようです。

東日本大震災から1年が過ぎました。愛でてよし、食べてよし、使ってよしと、日本人の暮らしの中にしっかりと息づいている多くの桜が、元気の源のひとつとなることを祈っています。

▲導誉桜

情　報　B　O　X

◆米原市教育委員会では埋蔵文化財発掘調査報告書第４集を刊行しました。

『国指定史跡京極氏遺跡発掘調査報告書』

※京極氏館跡第１～２次調査、弥高寺跡第１・２次調査を収録。非売品

◆米原市教育委員会では埋蔵文化財活用パンフレットを刊行しました。

『東西文化の交差点(スクランブル)・まいばら　―文化は米原を通った！―』

※東西文化の結節点や東西文化の境界などとよばれる米原市を遺跡や出土品で紹介しています。非売品

◆米原市教育委員会では埋蔵文化財活用マップ・リーフレットを刊行しました。

「米原市遺跡ルートマップ１　鎌倉・室町・戦国時代編」

「米原市遺跡リーフレット」（31～39）

31大谷吉継の首塚、32北畠具行墓、33伝京極満信墓、34伝土肥元頼墓、35新庄家墓所、36今井一族の墓、37能仁寺遺跡、38横山城跡、39法秀院墓

◆滋賀県教育委員会では、米原市教育委員会と協働して下記の埋蔵文化財活用ブックレットを刊行しました。

『近江の城郭４　京極氏遺跡群　―京極氏城館跡・上平寺城跡・弥高寺跡―』

◇問合せ先：米原市教育委員会歴史・文化財保護室
Tel 0749-55-8020　Fax 0749-55-4556

◆伊吹山文化資料館では、下記の冊子を刊行しました。

『伊吹山文化資料館年報13　平成22年度の活動』

※上野区にあった旅館対山館の戦前を中心とする薬草発注リスト収録。

「春照区の井戸探検マップ」

◇問合せ先：米原市伊吹山文化資料館　Tel /Fax 0749-58-0252

◆◆編集後記◆◆

県都大津には年に数回お呼びいただいたり、持ってったり、時々会議に参加したり■たいがい県や市町の先輩・同輩方と親睦を深めて■必ず何か情報を得てＪＲ近江長岡駅に降り立ちます■不況のなか、どの街もそうかもしれませんが…。近頃県都の駅前にはお店が少なく本屋もなく寂しい限りです■数少ない機会をとらえて、いろんな人からいろんな情報と技を仕入れてくる■これが米原市の歴史講座や体験教室、資料館講座のネタとなり市民の皆様に還元しています■皆様に感謝！(シャンギリっ子)

米原市文化財ニュース
佐　加　太　第 35 号
発　行　平成24年３月31日
編　集　米原市教育委員会
〒521-0242　滋賀県米原市長岡1050-1
米原市教育委員会生涯学習課歴史・文化財保護室
TEL.0749(55)8020
印　刷　はなまる商店

米原市文化財ニュース
佐加太

第 35 号
２０１２年 ３ 月 31 日
滋賀県米原市教育委員会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

姉川さざれ石

『君が代』の元歌は平安時代に編集された『古今和歌集』の賀歌(長寿・めでたいことを祝う歌)に、「わが君は　ちよにやちよに　さざれ石の　いわおとなりて　苔むすまでに」と収録されています。これがのちに『和漢朗詠集』で現在の詩句に替えられたといわれています。

伊吹地域では　古くから黒色緻密な石を "さざれ石" と呼び親しんできました。さらに表面に粒々が生じていれば良質とされました。近年、 "姉川さざれ石" の名で知られるようになったこの石は、マグマの熱や圧力で岩石や地層が変化した変成岩のひとつホルンフェルスです。以下、現地を踏査された鉱物鑑定士・磯部敏雄氏の報告を紹介します。

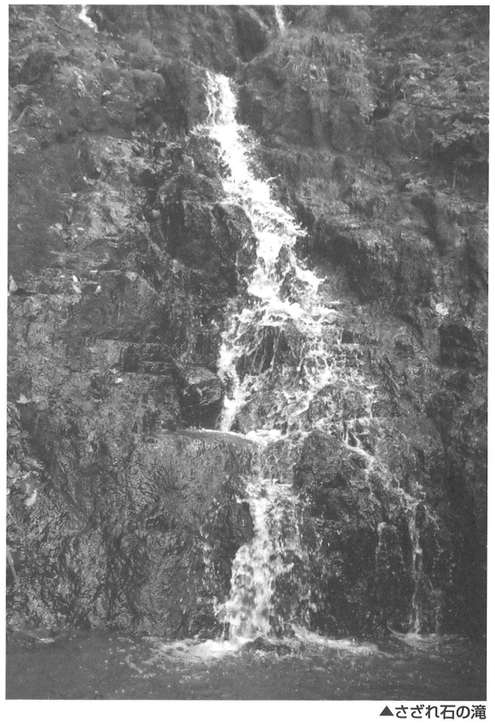
「現場は国見峠の東方に位置する谷で、地元で地域の活性化に精力的に取り組む『炭焼き保存会』によって発見された場所である。発見された現場には、大きな "さざれ石" が滝を形成し、その景観たるや圧巻である。このあたりには、長い年月の間に表面が浸食されたさざれ石の大露頭を見ることができ、まさに "さざれ石原産地" の発見を機に、現場(滝)で見られる岩石、および付近の地質を調査した。その結果と、私の所見をここに記します。

現場の滝では、白っぽい岩石が見られる。これは「晶質石灰岩(大理石)」といい、石灰岩がマグマの熱によって変成した岩石である。石灰岩に伴うチャートも変質している。青っぽい岩石は「緑色岩」でかつての伊吹海山ができたころの岩石で、これも同様の熱変成を受け、珪灰石やザクロ石という変成鉱物が見られる。滝を形成する林道の法面には花崗岩との接触部(熱変成部)の露頭を確認できる。加えて、国見林道にみられる玄武岩、貢岩、粘板岩、チャートにも、大地の変動をみることができる。とくにチャートにいたっては "鏡石(鏡岩)" も見られる。

以上の結果から、滝の黒っぽい岩石は、さざれ石の原産地であることはもちろん、その大きさや、滝の景観はもとより、大地の変動等、他に比類なき場所として高く評価できる。

鑑賞石(盆石・水石)の世界では、全国に名石として有名な滋賀県大津市瀬田川の「真黒石」(瀬田真黒)は黒っぽい変成岩のホルンフェルスである。いま "姉川さざれ石" と呼ばれているさざれ石は、瀬田真黒にも勝るとも劣らない石といえる。

以上のことから、姉川さざれ石、さざれ石の原産地は、今後の "まちおこし" の宝として大きな評価に値するものである。」



▲さざれ石の滝

調査報告①

京極氏館跡発掘調査　―第１～３次調査のまとめ―

平成17・18・20年度に、16世紀初頭の京極氏の北近江統治の拠点・京極氏館跡（国史跡）で第１次～第３次の発掘調査をおこないました。今年度、報告書を刊行しましたので、その内容について報告します。調査は史跡内の遺構の残り具合や出土品等から遺跡の性格を把握することを目的としました。その結果、①京極氏館跡の遺構面の検出、②礎石建物の検出、③庭園遺構との整合、など、当初の目的に揚げていた課題についてある程度の成果がありました。

絵図で「御屋形」と記された京極氏館跡は現状で南北二段に分かれています。調査では北側下段の地表下約40㎝で黄茶色の安定した粘質土層を確認し、これが南側上段の地表下約80㎝まで続き礎石や土坑・ピット・焼土などを検出しました。この遺構面は、調査区の北西部から庭園遺構の汀線までほぼ同レベルで安定して続いており、現状で二段に分かれている、京極氏館全面の約70m×40mの平坦面を一面として利用していることがわかりました。

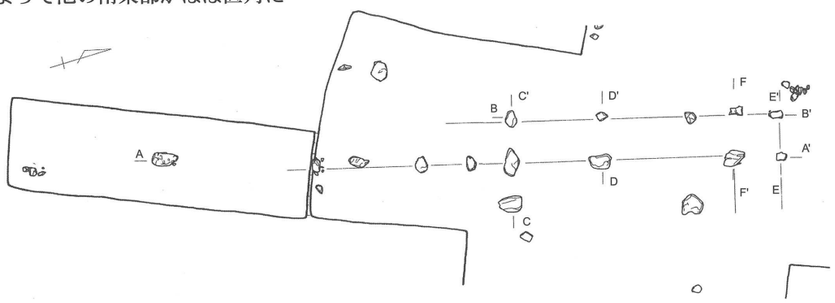
中井均氏の推定によると、居館部分の約70m×約40mという数値は守護館としては小さく、「御屋形」はハレの場だけでありケの場は東側の一段低い区画（「蔵屋敷」）を想定されています。そして、「御屋形」には、中央道路に面して礼門と副門を設け、南側半分の高まりを広場として一面に厩を配置。北側には主殿があり、庭園に面して会所（常御殿）と泉殿を想定されています。発掘調査の結果、南北の上下二段を意識することなくフラットな広大な一面としてこれらの建物を想定することが可能となりました。

模式図の会所部分にあたる、北西端で検出した礎石建物SB01・SB02は、ハレの空間の奥向きの建物群で、SB01は縁が巡る建物で会所を想定し、隣接する小規模なSB02は会所に付属する建物で泉殿や湯殿、厠などが考えられます。また、今回、庭園の池まで延長したトレンチによって池の南東部がほぼ直角に曲がる護岸であることを確認し、ここに庭園鑑賞用の建物があったことが想定されました。ここでも１点礎石を検出し、中井案に示された東屋かもしれません。

出土品にも大きな特徴があります。遺物の大半を占めるのはカワラケとよばれる土師器皿で、主従関係を確認するための宴会や儀式で用いられる清浄な器です。会所的建物と想定したSB01の周辺で濃密に出土しました。また、唐物とよばれ当時最高級の品であった朝鮮製や中国製の陶磁器など高価な品も出土しています。会所の床飾りなどに用いられた、権威付けのための威信財だったと考えられます。さらに、竿秤の錘が出土しており、領国内の度量衡などを管理する京極氏の経済的な側面がうかがえる遺物です。

現在調査はいったん中断していますが、今後も継続した調査をおこなうことで、戦国大名のあり方を知ることができる全国的にも貴重な京極氏遺跡の保存・活用を図っていきたいと思います。（髙橋順之）

▲京極氏館推定模式図



▲礎石建物SB01平面図

調査報告②

弥高寺跡発掘調査　―第１・２次調査のまとめ―

弥高寺跡での発掘調査は、平成18年度に本堂跡、19年度に僧坊跡の構造や遺構の残存状況を確認し、将来の保存・活用計画の基礎資料とすることを目的に実施しました。その結果、①山寺（山岳寺院）の基壇の検出、②本堂の規模・構造の推定、③庫裏と仏堂を併せ持つ塔頭跡の検出、④参道石垣の検出、などの成果があり、今後の整備・活用のための基礎資料を得ることができました。

８世紀に属すと思われる須恵器が出土したことがまず注目されます。これは、伊吹山山岳仏教の始まりが全国的にも最古級であることを考古学的に実証する資料となりました。そしてそれが弥高寺から始まった可能性が高く、現況でも伊吹山中の山寺遺跡の中で最大の規模を有し、歴史上も本末寺争いや「一の宿」争いで主導した弥高寺が伊吹山寺の中心であったことを物語るものです。

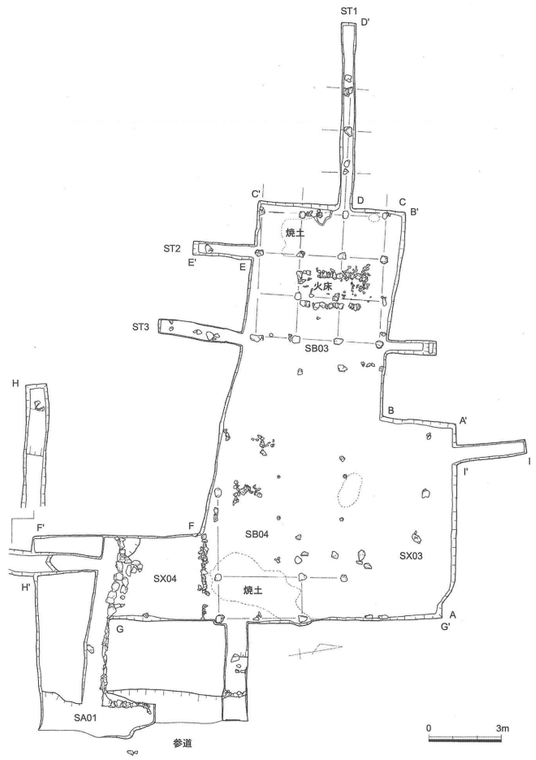
検出した基壇は階段状に石を積んで骨組みとし、その上に土を盛って亀腹状にしたものと考えられます。漆喰の痕跡がなかったことから土盛りの亀腹のようです。

発掘調査から想定される弥高寺の本堂は、直径約90㎝の礎石をもちその上に一尺五寸の丸柱が立つと思われる建物で、亀腹の石積みまで高床の縁を張り出し、軒と信者が入る外陣、諸仏があり僧侶が仏事をおこなう内陣に分かれ、それぞれの柱間が十尺～七尺五寸などと異なる五間堂の密教系寺院だった可能性が指摘されています。県内の現存建物では、湖南三山の長寿寺本堂や、大規模なものとしては比叡山根本中堂をはじめ湖東三山などの天台系寺院にみられるものです。伊吹山の南面中腹尾根上の広大な敷地に、広い前庭をもつかなり立派な密教系本堂が建っていたのです。

一段下の坊院跡からは、南北３間×東西６間の僧坊（庫裏）と仏堂を兼ねた塔頭跡SB03と、これと対峙する待合所的な建物SB04を検出し、弥高寺跡で初めて坊院全体の建物配置を確認することができました。塔頭は奥行きの長い妻入りの建物で、西の眼下に広がる琵琶湖、とくにその夕日が沈むさまを西方浄土として意識した構造です。弥高寺からみる雄大で荘厳な景色、往時は麓からみえたであろう重厚な本堂と塔頭群。これこそが山寺のもつ魅力であり、神仏の坐す伊吹山へ人々を誘う重要な装置でした。

塔頭跡の庫裏で検出した火床（囲炉裏）の遺構は山寺としては初めての検出と思われます。『慕帰絵詞』（室町時代）には僧坊と仏間が描かれ、その中に僧侶や稚児が配置されて、火床には鉄瓶・鉄鍋・五徳がおかれています。僧侶の周りには湯呑と天目台。仏間の阿弥陀如来の画像の前には文机の上に蝋燭・花瓶・香炉があります。今回の遺構や出土品からは、まさに『慕帰絵詞』に描かれた塔頭のようすが復元でき、僧侶の生活の一端がうかがえる貴重な調査となりました。

礎石建物SB03の礎石は焼けており、出土遺物の年代観から15世紀末から16世紀初頭の火災によるものと判断しました。創建年代は地鎮遺構SX03出土の古銭から15世紀第２四半期以降が考えられます。現況でみられる遺構はかなり整地されており、粗雑に盛られた坊院跡の土塁などは、寺院単独の改変というよりも、京極氏などの在地武家権力によるものと考えられます。（髙橋順之）



▲第２次調査区僧坊跡平面図